

# 栞集を詠む

松岡隆子

柿若葉鎌を振るふは子らのため

矢作裕子

6月号の当欄で〈雪解とは断りもなく消ゆること〉について、ご夫君の急逝を悼み、俳句が矢作さんの心の支えになるようにと書いた。いま矢作さんは掲句や〈ひたすらに夫の遺せし畑返す〉と詠むことで自らを励まし、確りと現実立ち向かっておられる。平成2年「朝」に入会され眸先生の薫陶を受けてこられた矢作さんにとって、俳句はいつも生活と共にあった。これからも日々の哀歎を俳句に託し、ご夫君への思いを詠み継いでいかれることだろう。

舟虫に磯の絶壁ありにけり

中谷信子

無数に群がって海岸や岸壁などを駆け回る舟虫。絶えず何かに追われるように駆け回っている。舟虫は泳げず、長く水中にいると溺れるそうだ。高波が来ると一斉に陸の方へと逃げ惑う。そんな舟虫に〈磯の絶壁〉が立ちほだかる。舟虫の活動を阻む険しく切り立った崖だ。その絶壁は時に私たちの前にも立ちほだかる。駆け回る舟虫に右往左往する人の姿を重ねるのは深読みであろうか。因みに先生の句に〈舟蟲に生れて舟蟲のほか産まぬ〉〈舟蟲や己れを知れば臆病に〉がある。舟虫は何処か人間臭い生き物のようだ。

ざりがにの弟の手に移さるる

平沢千恵子

ざりがにに釣りは夏の子供たちの楽しみの一つ。休日の公園の池や用水路は、ざりがにに釣りの子供たちで賑わう。親子連れの場合などお父さんの方が夢中だつたりするのも微笑ましい。

掲句、弟の手に〈移さるる〉の的確な描写が良い。釣り上げたざりがにを素早く網ですくい、「ほら、落とすなよ」と幼い弟の手に渡す。弟は急いでざりがにをバケツに入れる。弟の目の輝きと手のドキドキ感が伝わってくるようだ。